

ダニエル書 - 第八十六番

預言の解き明かし：知識の増加と真夜中の叫びのメッセージを理解する

Jeff Pippenger

2024-02-19

私たちは、終わりの時に封印が解かれるときに「知識の増加」が象徴的に何を表すのかをよりよく理解するため、第一の天使と第三の天使の運動の並行関係を扱っている。私たちは、それが最終的に「後の雨」として頂点に達する真理の高まり、すなわち「真夜中の叫び」のメッセージを表していることを示そうとしている。象徴としての「知識の増加」はダニエル書に由来し、そこでは礼拝者を試し、二つの階級に分ける預言的知識として示されている。

彼は言った。「ダニエルよ、あなたの道を行きなさい。これらの言葉は終わりの時まで閉ざされ、封印されている。多くの者は清められ、白くされ、試される。しかし、悪しき者は悪を行い、悪しき者のうちには悟る者がいない。だが、賢い者は悟る。」ダニエル書 12:9、10

1989年、「知識の増加」の封印が解かれ、それは最終的に礼拝者が二つの種類に分かれることを示すことになる。その二つの種類は、後の雨のメッセージに彼らがどのように関わるかという文脈で描き出されている。悪しき者たちは後の雨を認めも受け入れもしないが、賢い者たちはそれを認め、受け入れる。ゆえに悪しき者たちは、後の雨が降り始める時を見ない。そしてそれは、2001年9月11日に諸国民が怒ったときに降り始めた。私たちは、エゼキエル書8章と9章、さらにイザヤ書28章において描かれている、ラオデキア的アドベンチズムの指導部に語りかけてきた。イザヤ書では、「あざける者たち」は「偽り」を自分たちの「避け所」とし、「虚偽のもとに」身を「隠した」。

それゆえ、エルサレムにいるこの民を治める嘲る者たちよ、主の言葉を聞け。あなたがたがこう言ったからだ。「われわれは死と契約を結び、陰府と協定した。押し寄せる懲罰が通り過ぎるとき、それはわれわれには及ばない。われわれは偽りを避け所とし、虚偽のもとに身を隠したからだ。」イザヤ書28章14、15節

終わりの時代のエルサレムの長老たちは、「line upon line」という方法論によって示される「憩いと回復」の試験に不合格となる。この方法論は、ミラー派の歴史における後の雨の歴史的な例証を通して、賢い者たちが終わりの時代の後の雨を見分けられるようにするものである。イザヤがその箇所では強調している「あざける者たち」の預言的特徴は、彼らが身を隠し、自分の避け所としてきた偽りと虚偽である。ゆえに、後の雨のメッセージの試験（彼らが聞こうとしなかった憩いと回復）に関して、終わりの時代のエルサレムの長老たちは偽りを受け入れた。

後の雨のメッセージは、ハバクク書2章に示されているように、そこで見張り人が自分の歴史の「論争」において何と答えるべきかを神に尋ねるときに、論争とともに到来する。というのも、2章1節の「reproved」という語は「argued with」を意味するからである。

私は見張りの持ち場に立ち、やぐらに身を置き、彼が私に何と言われるか、また私が戒められるときに何と答えるかを見よう。ハバクク書 2:1

後の雨をめぐる論争において、賢い者たちは、ミラーの宝石として表される真理を提示する。それらはまた、ミラー派によって見いだされ、確立され、提示された土台となる真理でもある。これらの真理は、とこしえの岩であるキリストとして表されている。

シオンの城壁の上で神の見張り人として立つ者たちは、民の前にある危険を見通すことのできる人々、真理と誤り、義と不義を見分けることのできる人々であれ。

「警告が与えられました。1842年、1843年、1844年にこのメッセージが与えられて以来、私たちが築いてきた信仰の土台を乱すものを、何一つ入り込ませてはなりません。私はこのメッセージに関わっており、それ以来ずっと、神が私たちにお与えになった光に忠実に、世の前に立ってきました。日々、切なる祈りをもって主を求め、光を求めながら、私たちの足が据えられたその土台から退くつもりはありません。神が私にお与えになった光を、私が手放すと思いますか。それはとこしえの岩のようであるべきものです。与えられて以来、ずっとそれが私を導いてきました。」レビュー・アンド・ヘラルド、1903年4月14日。

古老たちは偽の後の雨のメッセージを唱えており、イザヤはそれを「偽り」と虚偽として描写している。エゼキエル書8章には、エルサレムの古老たちが太陽を拜んでいる時代を示す歴史が記されており、次の章では彼らは神の印を受ける者たちと対比されている。第三の忌むべきこと（世代）は、「タンムズのために嘆く」ことで表される偽の後の雨のメッセージを表している。1919年に始まったアドベンチズムの第三世代において、1919年聖書会議でW・W・プレスコットが公に提示した偽りの福音と関連して、「偽り」が持ち込まれた。その「偽り」は第三世代に特有の主題であり、その「偽り」こそが、「タンムズのために嘆く」ことで表される偽の後の雨のメッセージの偽りの土台である。

預言における「偽り」を的確に突き止めるために時間を費やすことは重要である。なぜなら、その「偽り」こそが、ラオデキヤ的アドベンチズムが1989年における知識の増加を認識できない主な理由だからである。「偽り」とは、ダニエル書における「the daily」がキリストの聖所での務めを表しているという主張である。「the daily」をキリストの聖所での務めとして預言的に適用することは虚偽で誤った預言的適用であるが、その「偽り」は単に「the daily」を預言的象徴として誤って同定することだけを指すのではない。それはまた、ホワイト姉妹がその誤った適用に同意していたと主張し、その虚偽を用いてその誤った適用を確立された真理として打ち立てるという「偽り」でもある。

ダニエル書11章の最後の六節に関する正しい理解は、30節から36節によって雛形として示されている。そしてホワイト姉妹がダニエル書11章の完全な成就を特定する際、彼女は、30節から36節に描写された「それらに類似した場面」が「繰り返される」と述べている。

“the daily”の誤った定義を採用すると、誤った歴史的構造が生み出される。ダニエル書11章30～36節に描かれている歴史には、“the daily”が取り去られることが含まれている。“the daily”の解釈は、ミラーライト派のものか、プレスコットとダニエルズのものかのいずれかである。どちらの解釈を選ぶかによって、

二つの異なる歴史的構造が生み出される。

彼の側に軍勢が立ち、彼らは力の聖所を汚し、日ごとのいけにえを取り去り、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。ダニエル書 11:31。

靈感によれば、この節に示されている、30節および32節から36節を含む預言的歴史は、ダニエル書11章の40節から45節で繰り返されることになっている。

ダニエル書第十一章の預言は、その完全な成就にほとんど達しようとしている。この預言の成就として起こった歴史の多くは、繰り返されるだろう。第30節には、「悩まされる」と語られている一つの勢力がある。[ダニエル書11:30-36引用。]

「これらの言葉に描かれているのと似た光景が起こる。」Manuscript Releases, 第13号, 394.

「the daily」が見つかる節は三十一節です。

彼の側に軍勢が立ち、彼らは力の聖所を汚し、日ごとのいけにえを取り去り、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。ダニエル書 11:31。

その節の「軍勢」は「彼の側に立ち上がる」。

「軍勢」は権力であり、彼らが「立ち上がる」相手もまた権力である。その節で「彼の側に立つ」のは「軍勢」であり、「力の聖所を汚す」のも「軍勢」であり、さらに「軍勢」が「日々のも」を取り去り、「荒廃をもたらす忌むべきものを据える」のもまた「軍勢」である。

黙示録第十三章において、竜、すなわち異教ローマは、教皇権に三つのものを与える。

私が見た獣は豹のようで、その足は熊の足のよう、その口は獅子の口のようであった。竜は自分の力と位と大いなる権威をその獣に与えた。黙示録 13:2。

豹のような獣はホワイト姉妹によってローマ教皇制だとされており、第十二章でホワイト姉妹は、竜がサタンであると同時に異教ローマでもあると述べている。

このように、竜は第一義的にはサタンを表しているが、第二義的には異教ローマの象徴である。『大争闘』439頁。

ヨハネの黙示録13章2節では、異教ローマは、496年、フランク人（フランス）の王クロヴィスから始まって、その軍事力、すなわち「武力」を教皇権に与えた。330年には、皇帝コンスタンティヌスがローマの都を離れ、帝政ローマの首都をコンスタンティノーブルに移したとき、異教ローマは教皇ローマにその権威の座を与えた。533年には、ユスティニアヌスが、教皇権をすべての教会の長、そして異端者の矯正者とする勅令を発したとき、異教ローマは教皇権に世俗的権威を与えた。

三十一節で立ち上がる「腕」とは、496年にクロヴィスに始まり、教皇権のために立ち上がった異教ローマの軍事力である。この行為ゆえに、教皇権はフランスを「カトリック教会の長子」、時には「カトリック教会の長女」とみなしている。三十一節では、コンスタンティヌスが321年に日曜法を公布し、その後330年に首都をローマからコンスタンティノーブルへ移したのち、かつて無敵であった帝国は崩れ始め、黙示録8章の最初の四

つのラッパの勢力がローマ帝国に対して継続的な戦争を開始した。蛮族とゲンセリックによる攻撃の焦点はローマの都に向けられており、そこは330年以前にはローマ帝国にとって「力の聖所」であった。330年以降、侵入する蛮族の戦争は「力の聖所を汚す」となり、496年に始まって異教ローマの「腕」が教皇権のために立ち上がるまで続いた。

異教ローマは、教皇権に軍事力・世俗権威・ローマ市における座という三つを与えただけでなく、教皇ローマのために三本の角も取り除いた。

私はその角に目を向けていたが、見よ、それらの間から別の小さな角が一本生えてきた。その前に、もとの角のうち三本が根こそぎに引き抜かれた。さらに見よ、その角には人の目のような目があり、大いなることを語る口があった。ダニエル書 7:8

ダニエル書7章で「引き抜かれる」ことになっていた三本の角は、教皇権の台頭に抵抗していた三つの主要な勢力を表していた。その三本の角の最後の一本は、西暦538年にゴート族がローマの都から追い出されたときに取り除かれた。彼らは異教ローマの「武力」によってその都から追い出された。というのも、その「武力」は538年に教皇権（荒らす憎むべきもの）を当時知られていた世界の王座に据えることになっていたからである。

ダニエル書11章31節は、「軍勢」（異教ローマ）が行う四つのことを示している。彼らは、496年にそうしたように、教皇権のために「立ち上がる」ことになっていた。彼らはまた、約二世紀にわたってローマの都で繰り広げられた軍事的抗争に表れているように、「堅固な聖所」を汚すことになっていた。さらに、538年には教皇権を地上の王座に「据える」ことになっており、また「常のもの」を取り去ることにもなっていた。

その聖句で「取り去る」と訳されているヘブライ語 (sur) は、「取り除く」を意味する。508年までには、ローマ帝国に存在し、教皇権の台頭を阻止しようと働いていた異教勢力の抵抗は、完全に服従させられるか、あるいは排除された。

「the daily」をキリストの聖所における奉仕と見なすのは誤った適用であるが、その誤った適用を真理として確定させたラオデキア的アドベンチストの歴史の中で実際に行われた働きは、アドベンチズムの第三世代において遂行された特定の「偽り」に基づいていた。ホワイト夫人の、ダニエル書十一章の最終的成就において三十節から三十六節の歴史が繰り返されるという指示は、エルサレムを支配している「嘲る者たち」が、予言の霊を同時に拒むことなしに三十一節を解釈することを不可能にした。

「あざける者たち」は、天の聖所におけるキリストの働きを模倣したものである教皇制のミサを導入することによって、教皇制がキリストの聖所における務めに関する真の理解を取り去ったと教えている。もしこれが「the daily」の実際の意味であるなら、三十一節で立ち上がる「arms」は教皇制ということになる。というのも、その節の文法構造が、「arms」こそが「the daily」を取り去る権力であることを要求しているからである。

彼らは自分たちの作り話の寄せ集めを擁護するために、教皇制（軍勢）がキリストの天の聖所を汚したと主張する。「力の聖所」の「聖所 (miqdash)」と訳されるヘブライ語は、異教の聖所か神の聖所のいずれかを指す。もしダニエルが、神の聖所が教皇制によって汚されることを伝えたかったのなら、神の聖所だけを表し得るヘブライ語「qodesh」を用いたはずである。では、天の聖所がかつて、あるいは将来、教皇制によって汚される

と、聖書や「Spirit of Prophecy」にどこに記録されているのか。

確かに、キリスト者の罪は天の聖所の記録の書に記されている。しかし、それは神の聖所が汚されたことを意味するものではない。聖所の清めは、聖所にある記録の書の清めを表していた。さらに、教皇権は決してキリスト教的なものではなかったので、調査審判の書に記録されたことは一度もない。教皇権に対して示されている唯一の審判は、神の怒りの執行審判である。

「『軍勢』もまた『荒廃をもたらす忌むべきものを据える』はずであったが、それはどの勢力を指すのか。教皇制はどの勢力を据えたのか。そして、三十一節のまさに冒頭で、教皇制が味方した勢力とは何か。」

ラオデキア的なアドベンチズムの中にあつて無学な人々は、封印された書を読むことができないとされている人々の手に自分の永遠のいのちを委ねてしまっており、その種のゆがめられた聖書の適用によって、かゆがる耳をなだめられていることに心地よさを覚えるのかもしれない。だが、彼らが自分たちの誤りを支えるために特定しなければならない歴史を取り上げ、それをダニエル書11章の最後の六節に当てはめようとするのは、いっそうばかげている。

ダニエル書11章40節の「南の王」として表されていることを示すことができるソ連の崩壊に至る過程において、アメリカ合衆国は軍事力をもって教皇権を支援した。ロナルド・レーガンが聖書の預言における反キリストと秘密の同盟を結んだからである。そうすることによって、508年に異教の抵抗が取り除かれたことに象徴されるように、教皇権の台頭に対するいかなるプロテスタントの抵抗もアメリカ合衆国において鎮圧されたことが示された。この箇所における北の王（教皇権）は、まず1989年にソ連を一掃し、その際、「戦車」と「騎兵」、すなわちアメリカ合衆国の軍事力、さらに「船」に象徴されるアメリカ合衆国の経済力と提携してそれを行った。

アメリカ合衆国は、教皇権のために立ち上がった「武力」であった。プロテスタント主義は、ちょうど異教の抵抗が508年までに鎮圧されたのと同様に、取り去られた。四十一節では、アメリカ合衆国は教皇権に征服され、アメリカ合衆国の「力の聖所」であるアメリカ合衆国憲法は、アメリカ合衆国が北の王（教皇権）を地上の王座に据えるとき、538年に異教ローマがそうしたように、覆されるであろう。もしあなたがこのウェブサイトの記事を読んでいるなら、『The Time of the End』誌をダウンロードして、ダニエル書十一章の最後の六節についての、より詳しい論述を読むことができるが、私たちは今、単に『the daily』をキリストの聖所での奉仕と特定することは、その象徴の誤った適用であると指摘しているにすぎない。私たちは、その誤った適用が意図的な虚偽によってラオデキア的アドベンチズムにもたらされたことを示すために、こうしている。

次回の記事で預言的な嘘についての考察を続けます。

私たちには一刻の猶予もない。私たちの前には苦難の時代が待ち受けている。世界は戦争の機運にかき立てられている。まもなく、預言で語られた苦難の光景が現実となるだろう。ダニエル書11章の預言は、ほぼ完全な成就に至ろうとしている。この預言の成就として起こった多くの歴史的出来事は、再び繰り返されるだろう。

第30節には、次のような勢力について語られている。「彼は心を痛め、引き返し、聖なる契約に対して憤りを抱く。彼はそのように行う。さらに引き返して、聖なる契約を捨てる者たちと通じる。彼に味方して軍勢が立ち、彼らは要塞の聖所を汚し、日々の献げ物を取り除き、荒廃をもたらす忌むべきものを据える。契約に逆らって悪を行う者たちを、彼は甘言で墮落させる。しかし、自分の神を知る民は堅く立って事を行う。民のうちの悟る者たちは多くの人々を教える。しかし彼らは、多くの日にわたり、剣と火と捕囚と略奪によって倒れる。さて、彼らが倒れるとき、わずかな助けを得るが、多くの者が甘言をもって彼らに付き従う。悟る者たちのうちの幾人かは倒れる。彼らを試し、清め、白くするためであり、終わりの時に至るまでそうである。というのも、それはなお定められた時のためだからである。そして、王は自分の意のままに行い、自らを高め、すべての神にまさって自らを大きくし、神々の神に逆らって驚くべきことばを語り、憤りが成し遂げられるまで栄える。定められたことは必ず行われるからである。」ダニエル書 11:30-36.

ここに記された言葉に描かれているような光景が起こるだろう。神を恐れる心のない人々の心を、サタンが急速に支配しつつあることを示す証拠を、私たちは目にしている。すべての者はこの書の預言を読み、悟りなさい。私たちは今、語られている苦難の時に入りつつあるのだから：

「その時、あなたの民の子らのために立っている大いなる君、ミカエルが立ち上がる。また、その時まで、国が存在して以来かつてなかったような苦難の時がある。その時、あなたの民は、書に名が記されている者は皆、救い出される。地の塵の中で眠っている多くの者が目を覚まし、ある者は永遠のいのちへ、ある者は恥と永遠の悔りへ。悟る者は大空の輝きのように輝き、多くの人を義に導く者は、とこしえまでも星のように輝く。しかしダニエルよ、この言葉を秘して、書を封印せよ。終わりの時まで、多くの者が行き巡り、知識は増し加わる。」ダニエル書 12:1-4. Manuscript Releases、第13号、394.